

序

この度、羊土社より「病態で考える 薬学的フィジカルアセスメント」を出版することになりました。2010年に厚生労働省医政局長より通達された「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」では、「薬剤師は薬物治療を受けている患者（在宅の患者を含む）に対してTDMやバイタルサインの確認，必要に応じてフィジカルアセスメント等により副作用や有効性を確認し，必要に応じて最適な薬剤とその投与量や投与時間を算出し，薬剤の変更等を含めた最適な薬物療法の処方を積極的に提案すること，医師の了解を得た上での打診，聴診，心電図解読などにより薬剤の薬学的管理指導を行って，薬剤の効果や副作用の発現などについてチームのメンバーと十分に情報・意見交換して，個々の患者に適切な処方を提案する」ことが言われています。これらのことを考えると，病態の把握なくしてフィジカルアセスメントを述べても十分な理解はできません。はじめは入門書の形で執筆を開始しましたが，もう一歩進めて、「病態で考えるフィジカルアセスメント」という視点に立って執筆し直しました。主訴（症候）からどのような疾患が考えられ，また逆に患者さんがもっている疾患はどのような症候を示すか，そして，その疾患はどのような身体所見として現れてくるのか。身体所見のとり方について，少し詳しく解説しました。このことは，疾患の病態を捉えるばかりでなく，薬物の有効性，薬物による副作用・有害作用の症候を捉えることにもつながります。

本書に出てくる身体所見のとり方は，専門性の違いはあるにせよ，普段，医師が一般に臨床で行っているものです。どのように所見をとって，体の中で起きていることを把握するのか，理解を深めて頂ければと思います。

薬剤師が行える診療行為については，医薬品の適正使用や薬剤師業務の医療経済学的評価に詳しい千葉科学大学の生城山勝巳教授に執筆をお願いしました。また，図中のモデルとして，日本大学大学院薬学研究科学生の栗田雅弘君，日本大学薬学部学生の吉田博美さんに協力して頂きました。編集にあたっては，羊土社編集部の秋本佳子様には多大な助言を頂きました。これらの方々協力なくしては，このような本はできなかつたと思います。この場を借りて，皆様にお礼申し上げます。

最後にこの本が，薬剤師の皆様が患者さんの病態把握，患者さんと薬との関係で主導的な立場をとるための一助となれば，この上ない喜びです。

2018年4月

日本大学薬学部臨床医学研究室
鈴木 孝